



# 貧乏臭



川崎ゆきお

「最近興味を持っていることは何ですか？」

面接官が質問する。

「貧乏神です」

面接官の細い目が少しだけ開いた。

「貧乏神」

「はい」

「どうしてですか」

「昔、貧乏神の漫画を見たのです。子供の頃、見たのですが、最近気になりまして」

「それは興味とは違うのでは」

「貧乏神が趣味ではありません」

「興味と趣味とは違います」

「はい、趣味ではなく、貧乏神に対する興味の方です」

「どのような興味ですか」

「貧乏に関する興味です」

「貧乏」

「はい、貧しいのではなく、ビンボーなのです」

「ビンボー」

「貧しいのと貧乏とは違います。そして、貧乏とビンボーとは違います」

「それは興味の部類に入りますかな」

「入ると思います。貧乏から様々なことが見えてきます。そのビンボーを象徴しているのが貧乏神なのです。神なんですよね。神」

「では、この質問はそれぐらいにして」

「もっと話したいのですが」

「いえいえ、あなたのことがよく分かりました」

面接官は、もう終わったような顔で、視線は宙に浮かす

それから二時間後。面接はすべて終わった。

「印象に残ったのは貧乏神君ですねえ」

「パフォーマンスかもしれん」

「そうでしょうか」

「だって、貧乏神に興味があるって、妙じゃないか。言わないだろ」

「本当にそう思っていたのでは」

「えっ」

「だから、正直に答えた」

「そこまで正直にはなれんでしょ。面接なんだから、話題や言葉を選ぶはず」  
「どんなものでしょうか」  
「面接はこれで全部か」  
「三十人です」  
「採用は」  
「二人です」  
「一人はもう決まっているねえ」  
「はい、あの方の紹介ですから」  
「じゃ、あと一人」  
「まずは貧乏神君を外すべきでしょう」  
「どうして」  
「社が貧しくなります」  
「それと貧乏神とは関係がないだろ」  
「まさか」  
「あの貧乏神を入れたい」  
「そんなことをすると、まともな新規採用は一人もいなくなりますよ。馬鹿坊やと貧乏神。何ともなりませんよ」  
「それでいい」  
「悪い趣味ですよ」  
「趣味と興味とは違う」  
「どちらにしても、悪趣味です」  
「こんな人材しか入って来ない……それを言いたい」  
「やけにならないでください」  
「どうせ、この会社にはもう将来はないんだ。誰を入れても同じようなものだ。ここは私の趣味と興味を楽しみたい」

一年後、この会社は倒産した。貧乏神の社員が入ったことが原因だと噂が広まった。それ以前から、ビンボー臭が社内に漂っていたので、貧乏神の道が既に通っていたのだろう。

